

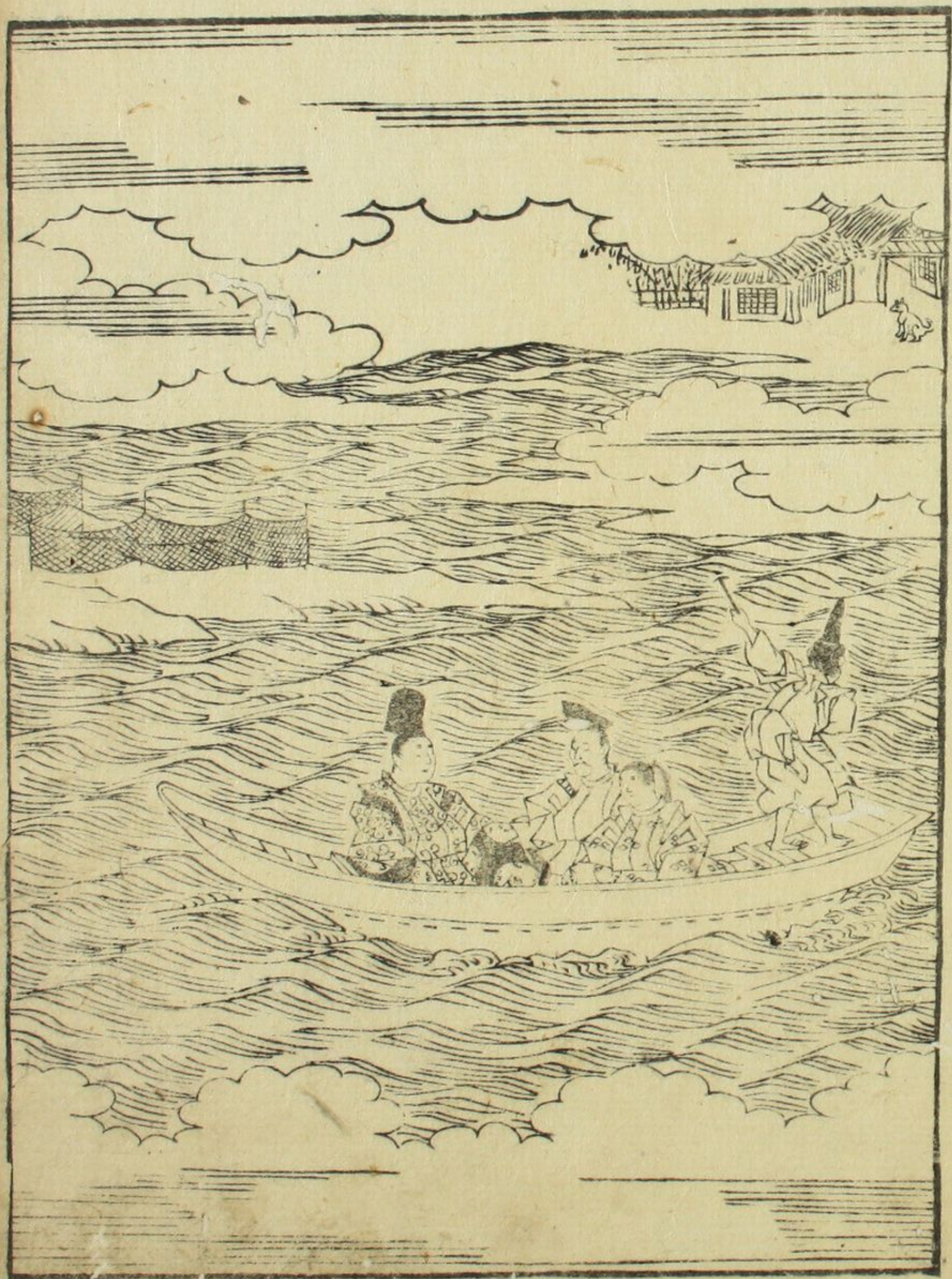


△明石

浪さる事よまをうへ海をうへに舟をふり波の  
告けり大右院の舟を敷てい浦をうへに舟を  
まもる事よまをうへ海の前乃國司とめふれ入る  
りよ是も源氏とが形一とくまをうへに舟を敷  
結ひぬ運ふ事よ源氏姫一とくまをうへに舟を敷  
系河一浦傳ひし事よまをうへに舟を敷  
舟をうへに舟を敷

浪谷氏紀伊守以聖

月光舟を敷る名乃しん舟





○漂

北東とみと津くしとらあそ

教りて罪波乃しとるもくひあはは何方とく  
思いうめきんいそあは源氏越へるくされて宛  
あくなり御信よ改まりあひては浪方くれあひの  
さとしも何吉の罪れは誓ひよあはて櫓乃比輪  
てあひく罪波乃御援あけてれあ言せし

江戸住未得

罪波江乃芦鴨のけしや

あはれあそ





蓬生

みよけうの並

末摘事小みしる義目とくく鼻あつと女居父交  
此流のうまはけく遠うるゆら住居中住のひし源氏  
次下すわ海流ひく茶散里北西方へ海りゆふふ  
厚ぬ乃流うく其世津前わくは古赤家あり是と  
ひらのまといはれん人せは蓬生と川の巻を由人  
入好して源氏 尋ても家てこつあるわめく  
うき世のりとれんとひき好也

村上氏令教

蓬生乃末はむ供りたききんうわ





関屋 男とけりし并

未

源氏石山へまゝてけりし昔宣蜂とゆふ一人の  
おのゝれひ昔懐乃玉司ふぬて下より一りついで  
系れりりよ守山かて冬まひの一人とまひ昔此  
事浅思ひせたる山よりあかぬふ所遠よ小恙とい  
まり思ひぬ昔人の心念れ一素とせりてゆふを  
けりしけりし昔のふれりて実と云ふし

未吉氏道節

けりしふいし終り

ふもせり人屋りれ



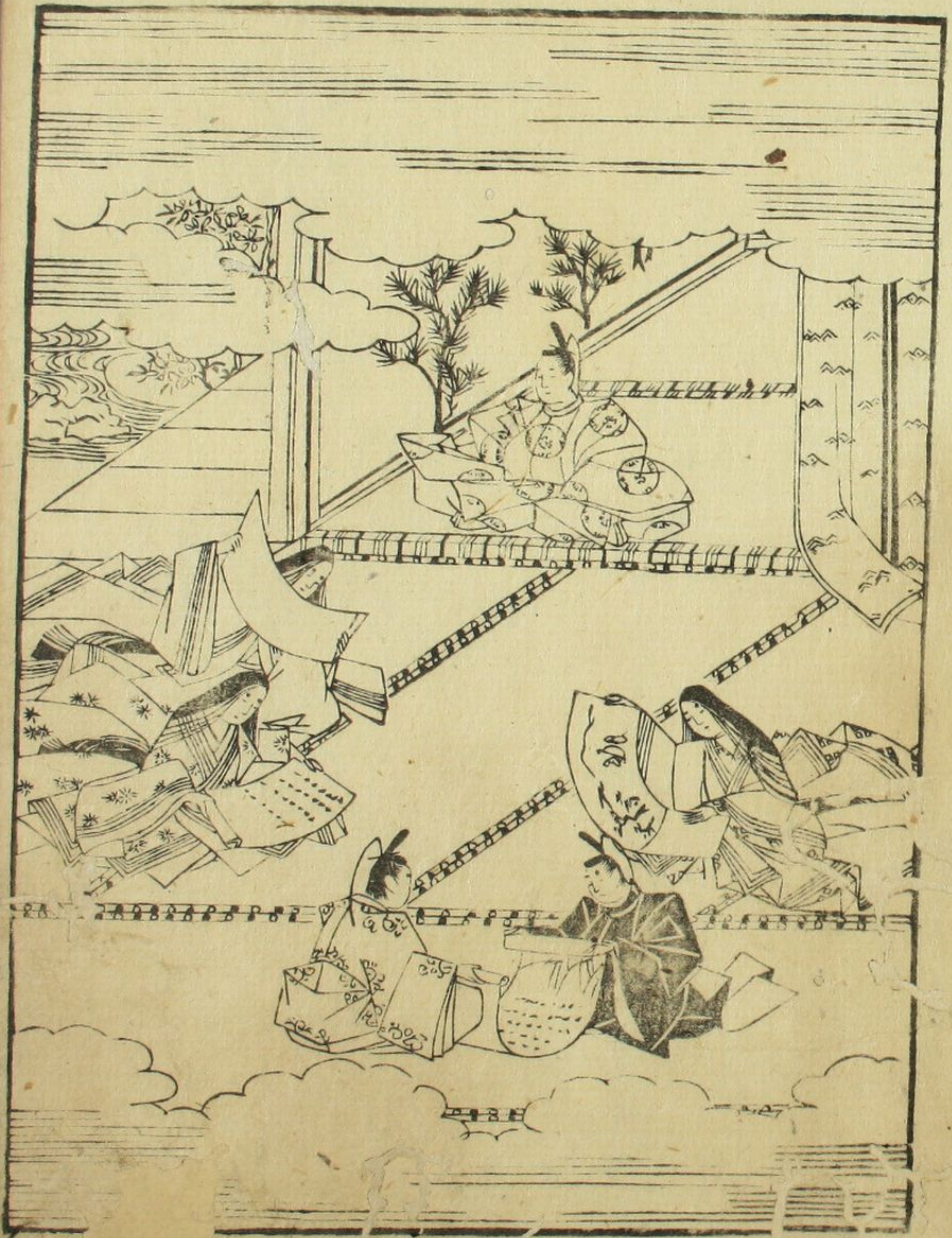


繪合

其比乃帝ハ冷泉院也帝美れ此事よりハ  
 中世移ル此際生十日比るれ大方れやと面白き  
 比弘徽殿と梅壺と名を知らぬ繪合を帝  
 信んぬよ丸梅壺をまゝ源氏のさかり次ハ  
 此二の絵と出されたり是より以て丸梅壺ハ  
 源氏次子より以て此は源氏ハ浦乃と云ふ山  
 久と云ふと云ふ一て事知れいそこれハ海  
 うらん也

住田氏改信

繪合小気此く一ヤ家乃エ



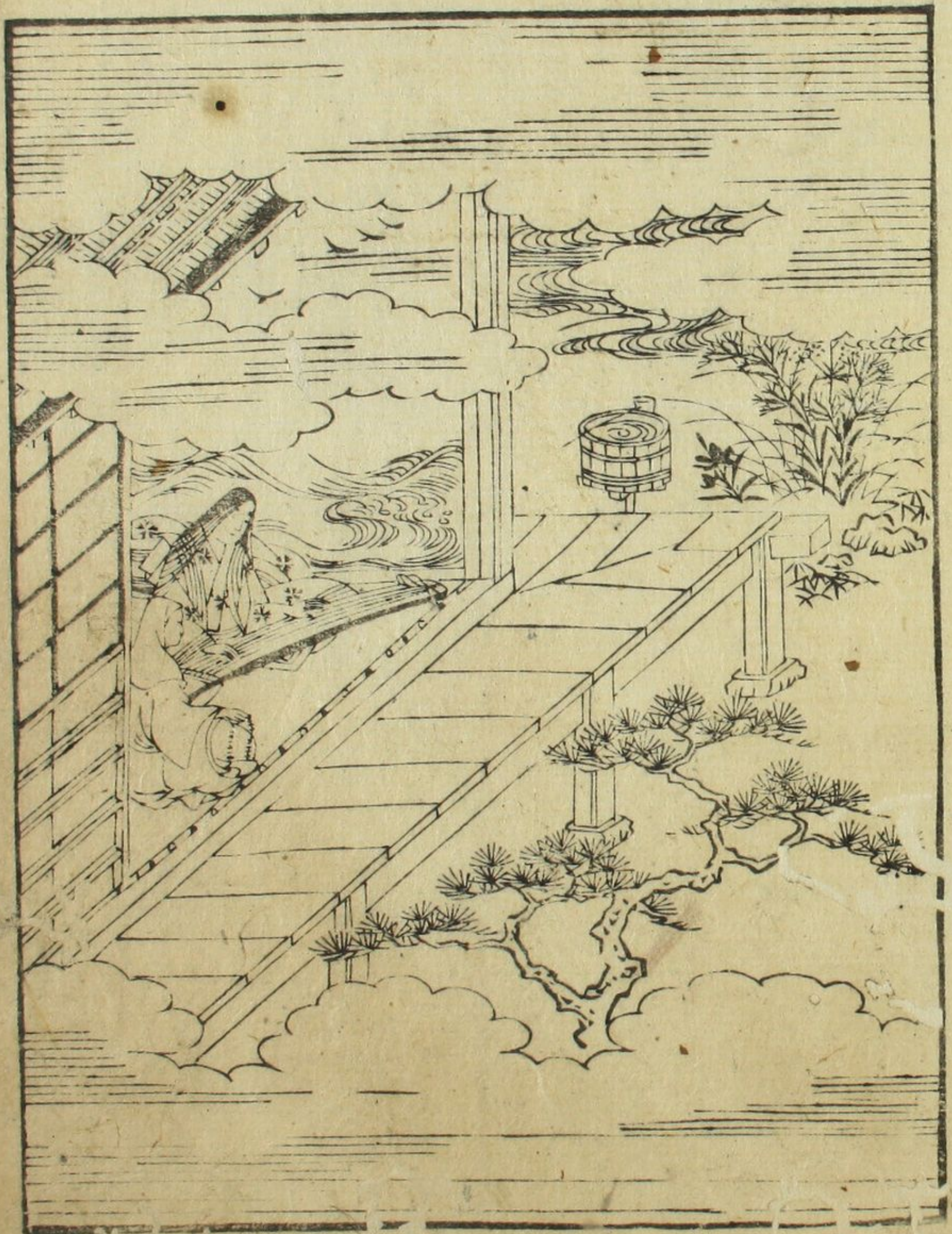


松風

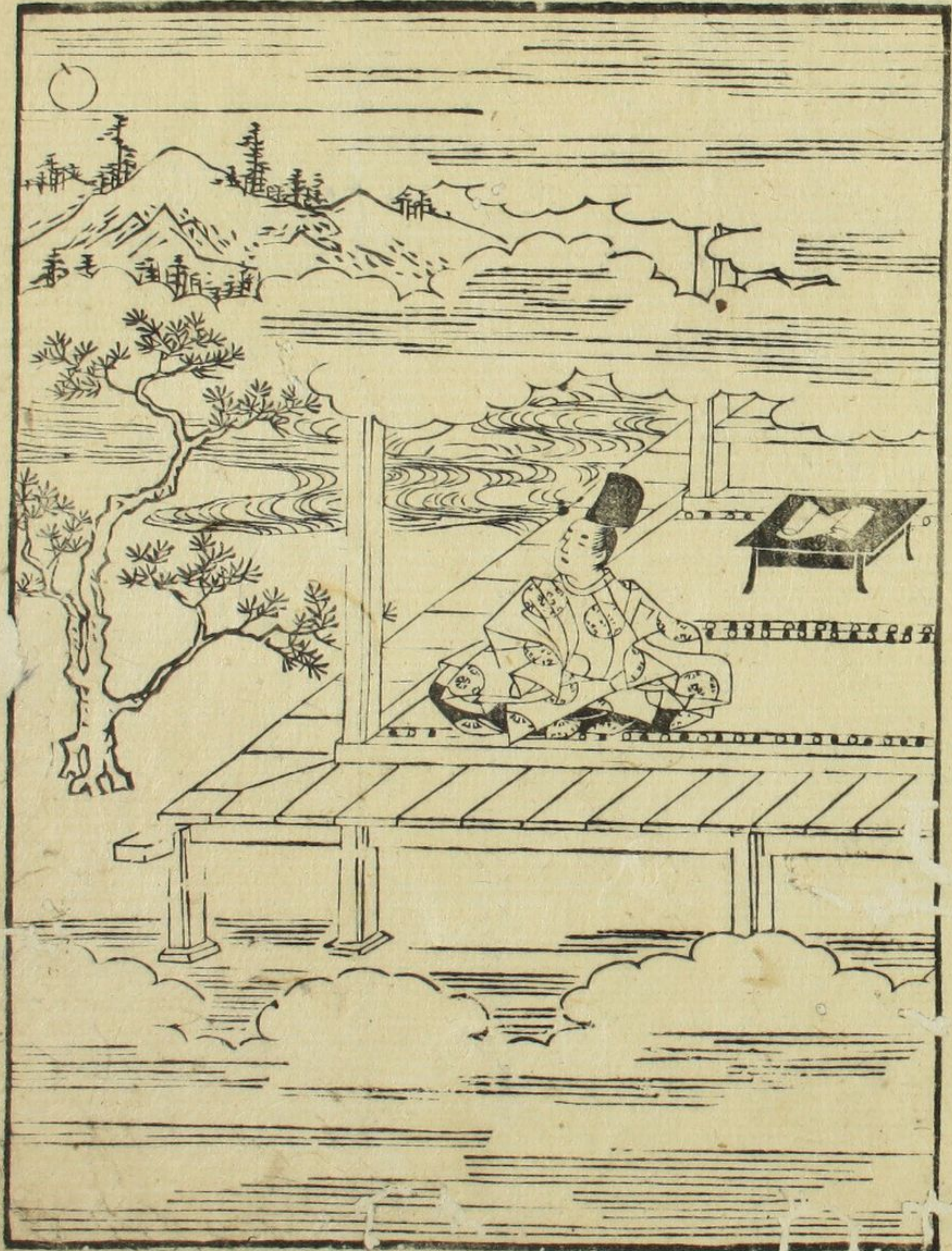
源氏物語の事て此志清くまじくして一人乃姫君出ま  
 させ給ひ三つよ夜あふありさうひ愈さうりあま  
 おほいで故浦より来むやりの宿へのあふ大老の行  
 居るもむらうりして大井河乃もよほの河津と  
 松風さうりまれば源氏物語の松風をよめ  
尾云  
 身とてひらりかまはる山里よきううたむ  
 春風うらうりとよませあふなるうらう

藤田氏友宣

さうりち門松風はあしうらう







薄雲

薄雲乃女院ニテ有テ壺井氏事也此女院  
 かくれ居て居居氏此ノ事ニ  
 入目少安子ノ事ハヒクニ事ハ此ノ事  
 神ノ事ハ此ノ事ト云フハ此ノ事ト云フハ  
 高瀬氏元晴

〜

〜

月乃歌







十六  
し女

賀茂乃際時の祭と大内母て勅さるふ比八十一  
月也んららわ因の女とろろて天人の姿よか  
しむて舞姫とよ源氏勅のふ年出めれよのみ  
まこひの娘と出流あてら侍もたは昔源氏れ若  
くおせし杉末はしりし女とこ言て忘那て流るよ  
し女みの神さひぬて津神あつまをの  
友よひい魚おまほとせんよまやとあぶたれ

伊勢佐望一勾當

ありて白ふ神示し女れ化粧が





玉鬘丸

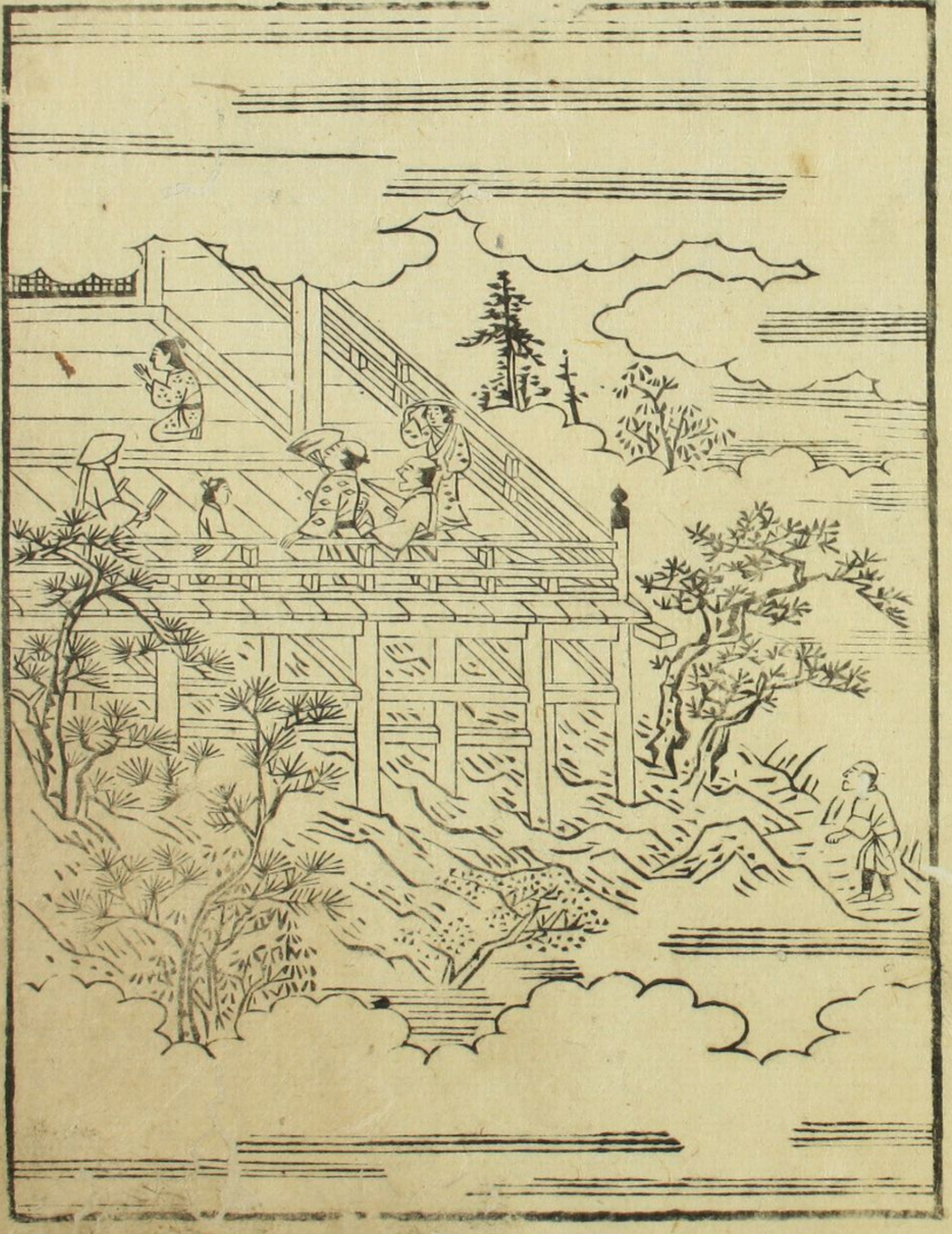
玉鬘丸の娘君凡此くしるるわりの娘ひもたを  
初瀬りて糸冬こく源氏より毎りしるむと  
りそりし形ゆいしはせまふと世果乃よいし  
そら此流程ふうとうむらひ娘ひさす

悲しき海舟かう積られとむろくしり娘  
はらと初めはしんと後多しりし娘は

安原氏貞室

心少きや

とくりし露乃玉うけり





初音 玉うつくしき

矣

の石乃上は始君と云の上は子ひかへし始ひて  
りしをば人あてまつる事あてまつる  
思ふよ正月朔日は言へみまると始小時  
奇よ明るの上

か一月は書よひつきて少は人よくよ  
く採るをよくよ海をのふなりき

正式子正親

うつくしき

學のひらく



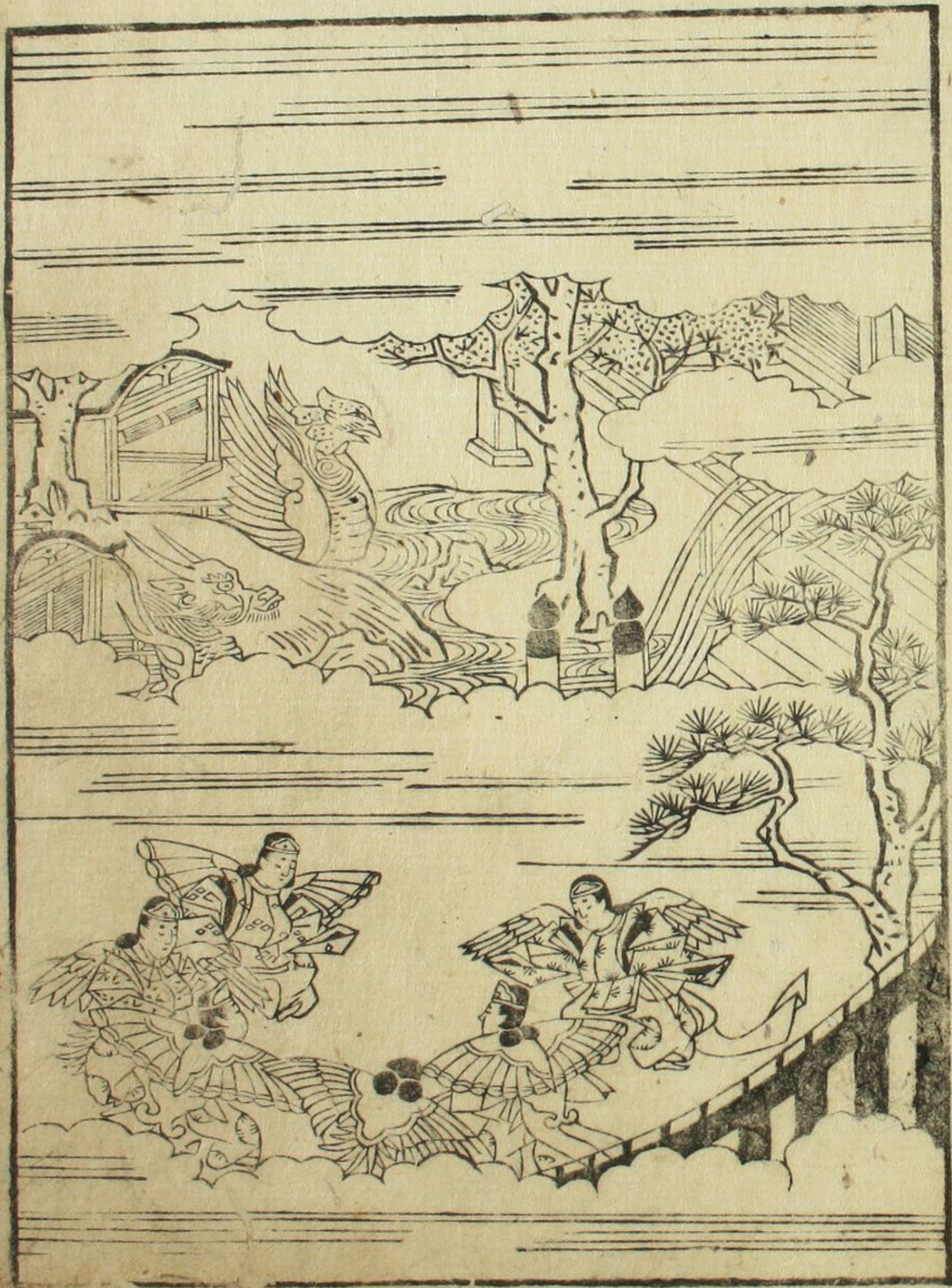


胡蝶 玉鬘乃並

昔の院乃宮一人后とともは續縁とていふ外も大  
 法念のを嫌好中文の六条院とて行をせ給ふは  
 了の世多れ上と佛おをも給ふとて中宮れの方  
 へ花もいともふ鳥蝶小童とて人々をとおとん  
 ぬとせ給ふをよま白く絲の系瓶とてとて蝶よ合  
 の花舞よ山吹お別れお乃一とていふ人々をせよ  
 とて白いと化せも園おのとてなり是をいひてふと云

澤田氏由雪

少時舞ハ面の目じりふことふれ





映虫

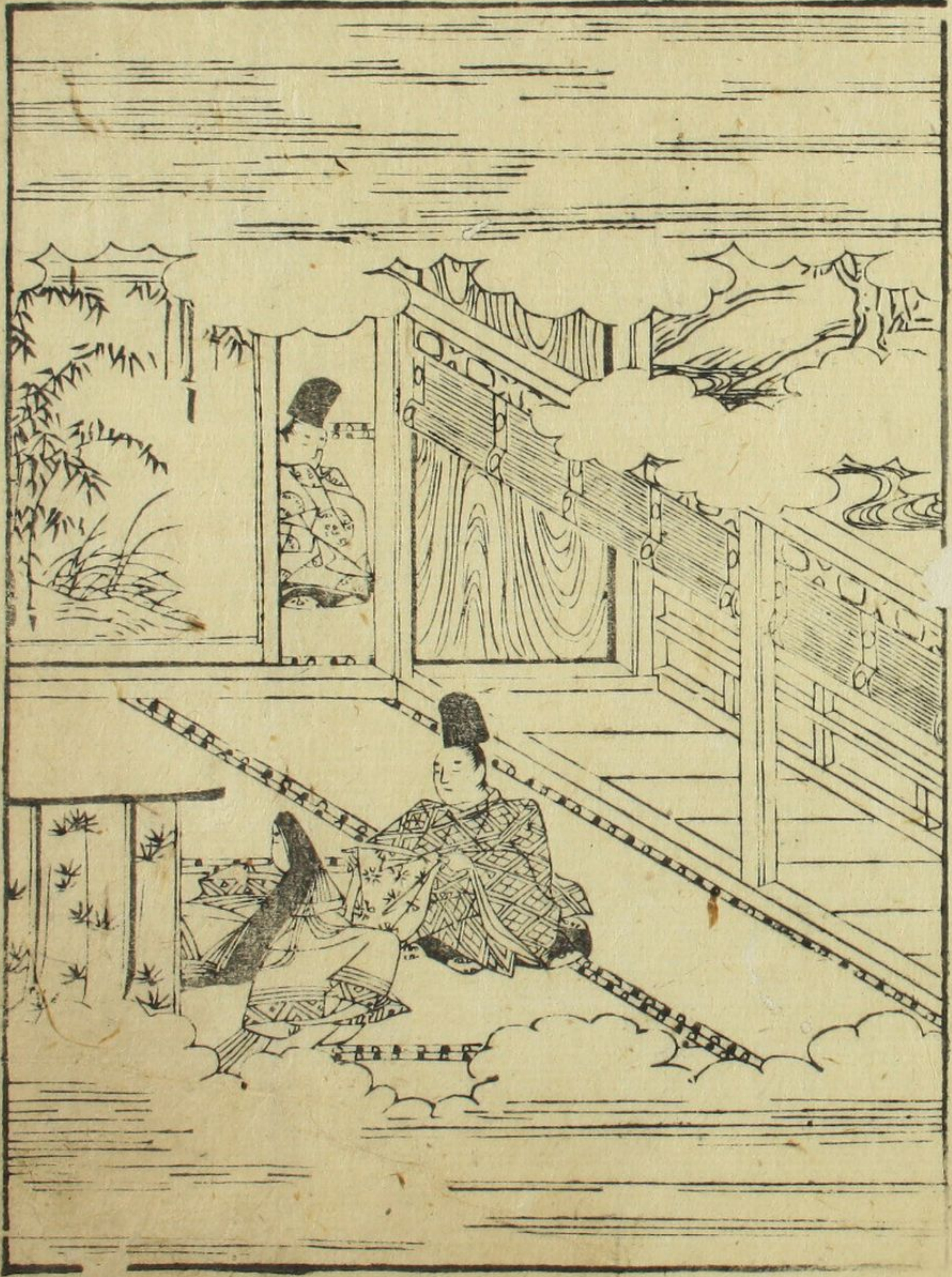
玉盤力れる光

光

此巻虫と之事無つる事よ  
鳴也と安の虫は思ふ人のきりゑとゆり抱く  
 玉盤力乃奇小  
おめでして力よのまふん  
 氏の子無つたはあひまを限あく心まうけぬいて  
 お月宮の夜おひておつ  
お月宮の夜おひておつ  
 姫君の心うららのまをぬれりおれと宮よと  
 てんふとゆくまんと其夕ア堂とあつめて几帳の  
 うらふお包て先とととんせてほのふみと奉  
 ころあふ

山本氏西武

堂火の家居とられ何〜うか





玉鬘りの侍者の小所方と西の對とりの其の三方に座  
は接子の父とておねて唐大和明佳友と桐植孫小  
は面をれ物縁よ父おとくひ姫君とてくく天流と  
也一は小な也世ひめ君と接子共云源氏に對  
入勢のまじしや

かてーこれさるがまー景色とかんはとや乃  
おとくや君んとははとる小な形を

要法寺上人友閑

う乃後をこころうーや花れ友

